

戦争から平和へ ～戦争と人々の暮らし～

6年 社会科

I 実践の目指しているもの

●当時の人々の思いに迫る

子どもは、物語や映画などを通して、ある程度は戦争に関する事象や被害などを目にしている。戦争は「よくない」「怖い」というイメージはあるが、幅広く実感的に捉えているとは言い難い。本実践では、当時の人々の思いに目を向けることで、目に見える被害だけでなく、心情面にも影響を及ぼす社会の状況を捉えられるようにしていくことを意図した。若者が自分の命を投げ打つほど、心の中まで影響を及ぼした当時の状況を理解することで、子どもは戦争の悲惨さや平和に対する認識をより深めることができると考えた。

●札幌の事例から確かな認識を育む

子どもは、自分との結び付きを強く感じることで、事象により主体的にかかわることができる。本実践では、教科書の事例に加えて札幌市民の体験談などを盛り込んだ。特に、子どもの学校生活に絞り込むことで、現在との違いや当時の子どもの思いをより具体的に捉えることができると考えた。

II 研究の内容

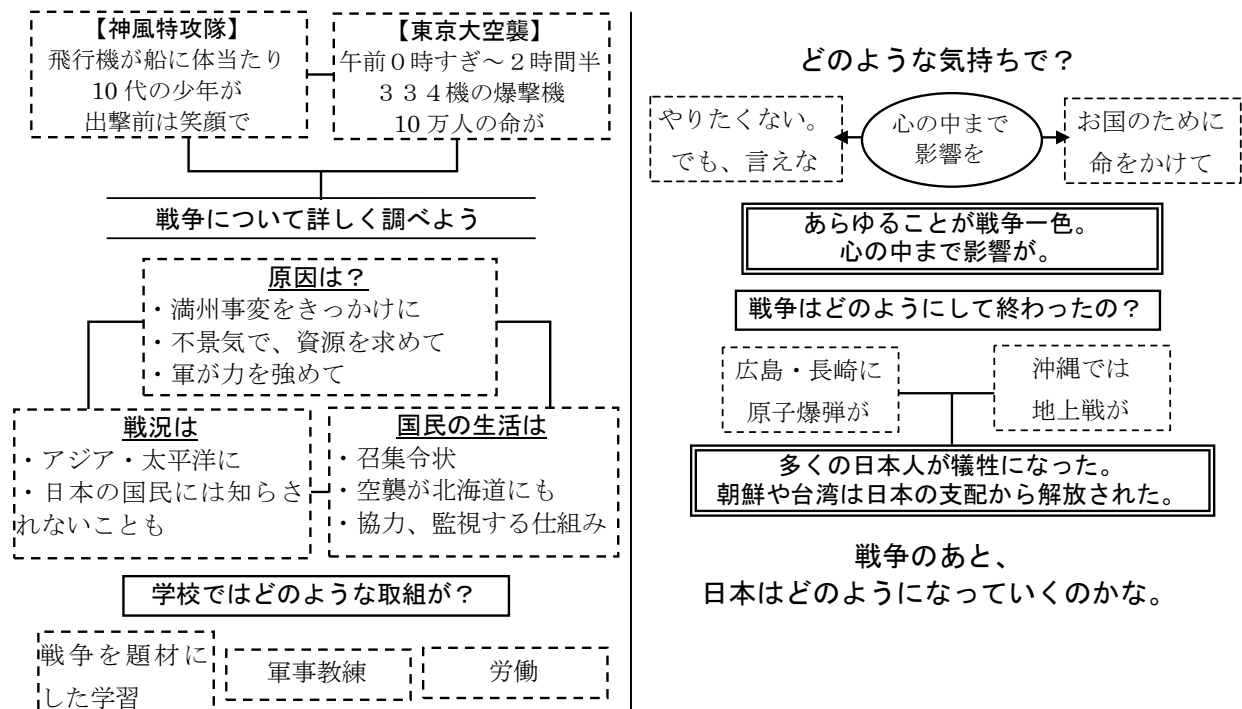
1 題材名（単元名）

戦争から平和へ ～戦争と人々の暮らし～

2 題材の目標（単元の目標）

日本の戦争がアジア・太平洋に広がっていった経緯や、国内の様子について調べ、人々の暮らしや他国との関係がどのように変化していったかを把握し、国内外の被害の状況について理解することができる。

3 題材の指導計画（8時間扱い）・単元構成など



4 本時について

(1) 本時の目標

- ・「国民学校」の名称や戦争体験者のお話から問題を見だし、戦争が激しくなった頃の学校の様子について調べることができる。
(観察・資料活用の技能)
- ・当時の子どもの思いを想像し、話し合う活動を通して、自由に発言できない状況や戦争に向かう気持ちが育てられていったことについて考えることができる。
(社会的な思考・判断・表現)

(2) 本時の展開 (5/8)

【前時までの子どもの姿】

日本が戦争に向かっていった社会背景や、戦争が始まってからの軍隊や国内の様子について調べている。隣組がつくられるなど、国民全体を戦争に向かわせる体制が強められたほか、雑誌や兵隊ごっこなどで子どもの生活にも戦争の影響が強くなってきたことを捉えている。



大谷地国民学校出身
 石光直さん

「勉強した記憶がない」

小学校→国民学校
 変わったのは名前だけ？

戦争が激しくなったころ、
 学校ではどのようなことが行われていたのかな。

学習

- ・算数の問題も戦争の内容だよ
- ・兵隊さんに向けた手紙も書いていたよ

軍事教練

- ・木刀で敵の大統領をたたいているよ
- ・木の銃をもって行進しているよ

労働

- ・小学生も農作業をしているよ
- ・武器を作る工場で働いている人もいるよ

どのような気持ちで行っていたのかな

やりたくない
 でも、言えない

心の中まで
 影響を

お国のために
 命をかけて

特攻隊員の遺書「実に喜び勇んでおります」

あらゆることが戦争一色。
 心の中まで影響されるような学習が行われていたんだ。

- ・戦争の激化によって、学校の名称が変わったことから、学習内容も特別だったことに目を向け、学習の見通しを立てる。

- ・教科書や資料集で学習や訓練について調べたことを位置付け、あらゆることが戦争に結び付いていることを捉えられるようにする。

- ・学習や訓練を行う当時の子どもの思いを、既習を根拠に想像することから、気持ちの面も影響を受けていたことに迫るようにする。

- ・特攻隊員の遺書を読み、想像したことを確かめる。

